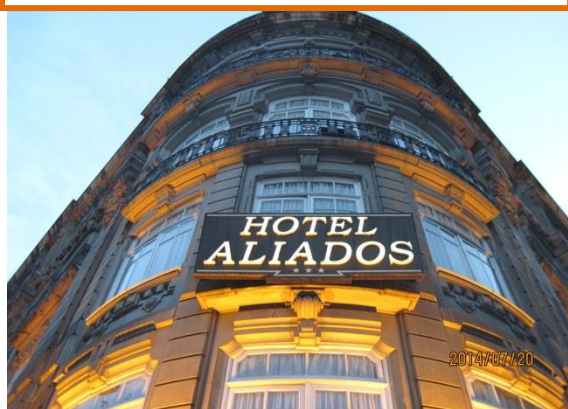


13. 港町旅情

今度の旅では、リスボン、ポルト、バルセロナ、セビーリャと4つの港町を巡った。港町に共通するものは、何と言ってもやるせない旅情を誘う雰囲気だろう。わたしはまだポルトにいるが、この町は港の中の港「ザ・港」である。ところがこの町にはリスボン程の哀情は漂っていない。第一、ポルトガルの代表的な大衆音楽、哀歌であるファドの唄声もここの街角からは聞こえてこない。



ポルト市役所本庁舎。ここからサン・ベント駅までドン・ジョアン1世広場が広がり、わたしのポルトでの宿アリアドス・ホテルもこの広場に面している。



ホテルの看板のある階のもうひとつ上の階の角部屋で快適な部屋だったが、最初の晩はお湯が出なかった。

むしろ首都であるリスボンよりも垢抜けた明るい街という感じがする。では全く哀愁のない街かというと実はそうではない。わたしはリスボンの最初の朝に感じた悲しみ、この国に遍在する哀愁のことを考えている。

この町が大航海時代に始まったこの国の繁栄を支えた期間は、ポートワインのおかげでリスボンよりも長い。ポルトガルと英国は同盟関係にあった。エンリケ航海王子もドン・ジョアン1世に英国から嫁いできたランカスター公の娘フィリッパが母親だが、英国とポルトガルの同盟関係は、1386年に締結されて以降一度も破約していない。ヨーロッパでは稀有な関係を築いているのだ。

英国とフランスが常に敵対関係にあったこと、フランスが常にスペインの後ろ盾であったことなどが同盟関係を保った政治的な理由だろうが、もうひとつポートワインの存在もあったはずである。自国でワインの生産ができない英国にとって、航海者達の命を守るためにはポートワインは欠かせない。英国が世界の海の覇者となってから、ポートワインの英国への輸出がポルトの経済を支えていたともいえるかも知れない。どことなく鄙びた感じのリスボンと違って、ポルトが垢抜けているのも英国との交流があったからかもしれない。

繰り返しになるが、ポルトは川港である。例え深い入り江にもぐるように造られた港であっても、海の港の場合、背景は水平線まで空と海が広がる。同じ青空でもわたしたちの知っている太平洋の海の色は明るく、その照り返しのためか港町の空気は、日本の場

合いに限らず春夏秋冬を問わず常にどことなく明るい。

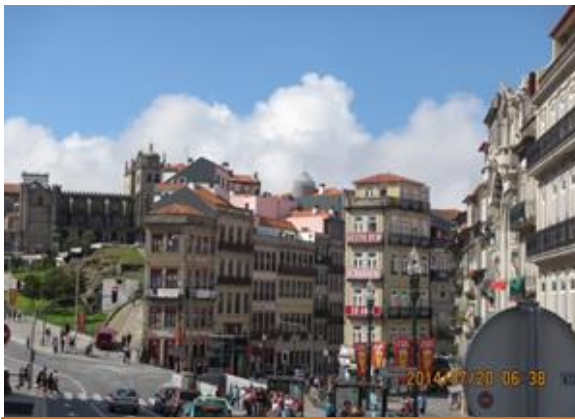
ポルトもリスボンも川の港である。川の港といっても、海からそんなに離れているわけではないけれど、それがポルトガルの港町特有の空気の哀愁を醸し出しているのだろうか。

ポルトでの宿は市役所前に広がる賑やかなドン・ジョアン1世広場にとったので、港にも、サン・ベント駅にも、エンリッケ航海王子の生家にもドン・ジョアン1世橋にも、歩いて周れた。それでも市内の新旧の路面電車に乗ってみた。また、ドン・ペドロ1世橋の旧市街側のたもからはケーブルカー、醸造工場のある側のたもからは小さなゴンドラのロープウエーにも乗った。人口わずかに23万人というのに、さすがに中世以来の殷賑を極めた港町中の港町である。イベリア半島の町のどこに行っても感じるのだが、公共



ホテルのテラスから見た夕暮れ迫るドン・ジョアン1世広場。

交通機関、自転車、歩行者と自動車の共生関係がきちんと成立しているのだ。翻ってでは、何故日本ではそうならないのか考え



サン・ベント駅前から河岸棧橋に向かう坂道の始まる場所は、観光客相手の店が並んでいる。

させられる。文明というものは、追いつけ追い越せ式に突っ走っただけでは身に着けることのできない何かを包含していて、残念ながら、日本と日本人がそのことに気が付くいとまもなく、明治以来の西洋化と近代化を突っ走ってしまったせいなのだろうか。



ドン・ジョアン1世橋の上から眺める河岸棧橋、大航海時代の雰囲気をは彷彿とさせている。



ポルト市内を走るトラム（路面電車）の駅。路面電車なのでプラットフォームが低い。

市内を駆けめぐる近代的なライトレール方式の路面電車よりも、歴史を感じさせる路面電車よりも、わたしには人と路面電車と車とが、ゆったりと同じ道路空間を共用していることの方が印象にも残ったし、うらやましかった。ヨーロッパの辺境であるこのポルトの港町の空気を吸いながら、つい故郷大分を比べてしまった。東の辺境である日本の片田舎の港町のことを。